

上卷

貴女のお尻に
ビール瓶
南海部 覚悟

福岡の大濠公園です。



昼下がりの陽光を、池の水面の揺らぎが反射して、湖岸のマンションの天井クロスを揺らします。

夜勤明けの黒木玲子は、微睡む視界にその幻想的な光のリズムを、捉えていました。意識の解像度が高まるにつれて、聴覚の奥に継続する耳障りな高音が、隣の部屋から発せられる機械音であるのに気が付きます。

体を起こして、引き戸をそっと引き開けます。

「何してるの？笑ちゃん。」

驚いた様子で振り返った白河笑子が「御免なさい先輩・・・起こしちゃいました？」ダイニングテーブルの上に設置された3Dプリンターのチャンバーを見ると、クリスタルブルーの半透明な円筒が、少しずつ成形されつつあります。

表面が複雑な皺模様に覆われていて、女性の部屋に在るものとしては、少々卑猥な円筒形です。

「先輩の好きなあれ・・・あれですよ、今あるのが蠕動機能が壊れちゃって、こんなモノ恥ずかしくて店頭では買えないですからね・・・プログラム通販で購入して、今出力しているんです。今回はプリンターも、ピュアマテリアルを取り寄せました。高性能ですよ！」

「笑ちゃんったら、昼間から・・・。」

ポッと頬を赤らめた黒木玲子の傍らで、ファクシミリが唸りを挙げてコピー紙を吐き出し始めました。

「部長から、臨場要請よ！」

「人が血を流して道路に倒れてるって、現場は福岡市中央区大濠公園——この近くだわ。」

「市の美術館の前に人だかりができてます、あれじゃないですか？」

テラス窓の先を笑子が指差します。

「急いで着替えて！直ぐ出るわよ！」

非番にも拘らず黒木玲子が張り切っているのには、理由があります。

警視庁桜田門から煙たがられ、警察庁を經由して九州大分に厄介払いされた拳句、更にこの先沖縄か小笠原にでも飛ばされそうな雰囲気の中、着任した大分県警で世間を騒然とさせた大事件を解決に導いた手柄を評価され、福岡で一定の成果を上げれば、二人とも東京に呼び戻す旨の内示を、県警本部長から内々に提示されていました。

LGBTのパートナーである笑子には伏せていましたが、薄々彼女も気が付いているようで、普段は腰の重いきゃぴきゃぴギャルが、この2~3ヶ月はすっぴんのまま、現場に臨場していました。

玄関ドアを開く直前、玲子は笑子の首に両腕を廻して、いつものくちづけを・・・耳元で二人同時に囁きます「**Lesbian Go!**」

「これが、被害者が昨日まで着ていた衣類よ、調べてみて。」

「何処にあったんですか？こんなもの。」

鑑識の奥寺が、玲子から渡された穴だらけのジャケットを、作業台に拵げながら尋ねます。

「中洲のバーよ、被害さんそのマダムと仲が良くって、昨夜遅く店に転がり込んできたらしいのね。近くで出入りがあってひどい目に遭った、追われているから着替えを貸してくれって・・・脱いだ上着を見たら、穴だらけだったから、貰ってきたの。」

「出入りって・・・被害はその筋の方？」

「そう、筑豊の地場の暴力団員、若頭やってたみたい・・・一課の事件なんだけど、暴力団対策部が絡んできて、大変なの。」

「解剖が終わらなきゃ、事故か事件か分からんでしょ。穴の周りの繊維が焦げてますねえ、でも弾痕にしちゃ少し小さすぎる――それに血痕らしいものの付着もないし、取りあえず医学部の解剖医に穴の位置を連絡しておきます。さっきメールがあって、死因の特定には時間のかかりそうなこと言ってますよ。――おや、これなんだろう？」ジャケットの二重ステッチの下から、ゴマ粒のような黒い点をピンセットで摘みあげると、ライトテーブルのスイッチを入れて、大きなルーペスタンドで、一心に観察を始めました。

部屋のドアを少し開けて、笑子が手招きしています。

「被害さんの仲間が3名出頭してきたらしいんです、任意で事情を聴いてほしいって・・・。」

「それで、昨夜は害者さんと一緒に遅くまで飲んでたのね？」

「そうだよ、日頃世話になってる兄貴を、俺たち博多の若いのが行きつけの店で接待してたんだ、そしたらこともあろうに肩ぶつけてくる不届きな野郎がいてよ、気分悪いから裏の路地で少々可愛がってやろうって、連れ出したんだ。」

「貴方たちと、同類？」

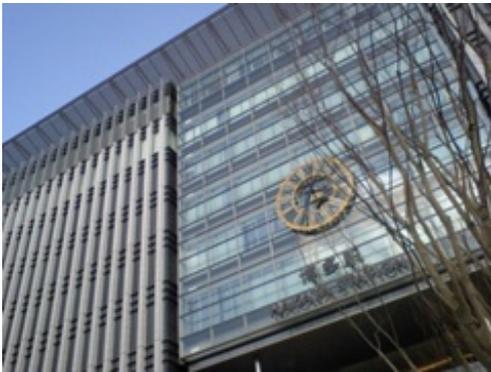
「いや、ただのサラリーマンだろ、顔クシャクシャにして泣き喚いてたからな。」

「兎に角、路地に引っ張って行って、二三発喝入れてやった。店の残飯のポリバケツに蠅がワンワンたかってよ、そこにそいつの頭突っ込んでやったのさ。飲み直すつもりで取って返したその瞬間だった、背中に軽い衝撃があって直後にもものすごく熱くなった、眼の前の兄貴の背中から白い火花が噴き出た、てっきり背後から撃たれたんだと思った、出てきた店のドアも中から鍵掛けてやがる、皆てんでんバラバラで路地から逃げ出したんだ。」

「撃たれてたの？」

「それが変なんだ、何とか近くの公衆トイレにたどり着いて、ブースの中で服を脱いだ、転げまわる程痛かったんだが、血は一滴も流れてねえ、着てたシャツをよく見ると、小さな焼け焦げが3箇所できてる、そして背中には――ほれ！」

肌蹴た刺青の背中に、赤黒く変色した火傷の痕が3箇所痛々しく刻印されていました。



取調室を出ると、笑子が玲子に小声で呟きます。

「他の二人も、ほぼ同じ話をしているようです。」

「あした、サラリーマンを痛めつけた路地に行ってみましょ、店の従業員に聴けば、サラリーマンの素性もわかるかも知れない・・・。」

「でも、あんな連中には、丁度良いお灸ですね。」

「――お灸？ そうね、確かにあいつ等にとってはお灸に違いないわね。」

中洲のビルの谷間のその路地は、入り口から30m程で袋小路になっていました。

大型のポリバケツが並べてあり、店の裏口のスチールドアがあるだけで、監視カメラも設置されず、建物の窓にも一切面していない、殺風景極まりない場所です。

当のサラリーマンの素性は直ぐに分かりました、2か月ほど前から毎週末、ひとりでこの店に飲みに来ているようで、店のホステスが名刺を貰っていました。

「このドアから路地に連れ出されたのね。」

「そう、直ぐにマスターが内側からロックしちゃったわ、あの連中にはいつも迷惑してるのよ、マスターも拘わりたくないみたい・・・不運なお客さんは可哀そうだったけどね。」

玲子がノブを押してスチールドアを開けると、丁番の辺りから耳障りな金属音が店内に響き渡ります。

「御免なさい、驚いたでしょ？マスターがいつも調整してるんだけど、この音直らないのよね。」

「じゃ、サラリーマンが殴られてるとき、路地に出た人は？」

「誰もいないわよ、みんな怖がってたから・・・それに、ドア開けるとこの音だから、直ぐに気が付くわ。」

早良区の紅葉八幡の向かいに、小さな輸入家具専門のインテリアショップがあります。ホステスに名刺を渡したサラリーマンは、そこで納品担当の営業課長をしていました。

「いや、ひどい目に遭いました、用を足して自分の席に戻ろうとしたら、いきなり目の前に立ち塞がれて、酔った足元でふらついたら、肩が軽く当たったんです。売り言葉に買い言葉で、こっちも少々大人気無かったんですが、廻りの若い連中に両腕掴まれて、裏口のドアに引きずられていきました。」

「告訴されますか？」

「いや、ああいう連中とこれ以上拘るのは不毛ですから・・・。」

仲間の一人が大濠公園で亡くなった事情を話すと、「私が殺したとでもいうんでしょうか？被害者なんですよ私・・・見てくださいこの背中！」

肌蹴た背中には、出頭してきた男同様の火傷の痕が数か所刻印されていました。

黒木玲子と白河笑子は地元国立大学医学部の一室で、女性解剖医の話をも神妙に訊いていました。

白衣を纏った細身の女医が、大きなレザーのアームチェアに深々と座り、長いパイプの電子煙草から、甘いフレーバースモークを漂わせています。

「ニコチンが入っていないから、受動喫煙にはならないわ、心配しないでね。」
玲子に視線を合わせると、「あなた、いい体してるわね、肌も白いし艶っぽいわ。」そう言いながら手を伸ばします。

驚いた笑子が、玲子と女医の間に割り込むと、「―――なんだ、そういうこと。」
艶のある長い髪をかき上げながら、今度はテーブルの上の資料に、蒼白い手を伸ばします。

「―――結論から先に言うわ、死因はアブリン毒素による急性中毒死。」
「アブリン毒素はね、唐小豆の種子に含まれる毒素なの、細胞内のリボゾームに作用して、タンパク質の生成を阻害する、同様な毒素に化学兵器にも使われるリシンがあるけど、リシンより毒性が強いわ。」

「大きな外傷は無かったけど、口や肛門から相当の出血があって、アブリン中毒による多臓器不全に伴うものだわ、開いてみたら肝臓も腎臓も血だらけだった。」

「その、唐小豆というのは簡単に手に入る食品なんですか？」
スマホで検索しながら、笑子が尋ねます。

「お汁粉にして食べてみる？」
小馬鹿にした表情で、女医が笑子を見ます。

「沖縄には自生してると思う、漢方薬品店に売ってるかもしれない、紅くてきれいな種子だから、乾燥させて装飾品に使うこともあるわ。ロザリオってあるじゃない、ほら、聖職者が下げる十字架の付いた首飾り、昔はそれに使っていたみたい。」

「害者さんはそれを誤って食べたのでしょうか？」
あきれ返った視線が、笑子を襲います。

「お汁粉が嫌なら、フラッペに掛けてみる？」
「経口摂取じゃないと思う、注射か何かで溶液として注入されたのよ。他殺に違いないわ。」

「外傷はないって言ったけど、小さな火傷の痕が4か所背中にあった、おたくの鑑識課から送られてきた、上着の穴の位置と一致したわ。」

「注射の痕は見つからなかったんですか？」
今度は玲子が尋ねます。

「あったわよ、背中の肩甲骨の直ぐ下に一か所、もう少しで火傷の痕と重なって分から

なくなるとこだった。」

「毒素を注射されて、何時間くらいで死に至るんでしょうか？」

「注入の量によるけど、8時間くらいから症状が出始めるでしょうね、半致死量が微量だから、10時間後には確実に死んじゃうんじゃない。でも、この娘なら大丈夫じゃないの・・・。」



廊下に出た途端、笑子が苛立った表情で呻きます。

「いけ好かない、医者ですね！お高く留まっちゃって・・・お尻ひん剥いてぶち込んでやろうかしら！」

「笑ちゃんったら！はしたない！」

「そうです！レディに有るまじき言葉です！でも、あの女医のけつの穴ほじって・・・。」

玲子が慌てて笑子の口を蔽います。

すぐ後ろのドアが開いて「――私のお尻がどうかしたって？悪いけど私、穴見っていうの・・・ドクター穴見、宜しくね。」

直後に玲子の携帯に笑子のメールが着信しました。

(・・・ビール瓶ぶち込んだりる。)

「鑑識の奥寺君からメールが届いてるわ、大変なことが分かったから直ぐ帰れって、あちこち変換間違えてるから、よっぽど大慌てで入力したのね。」

スマホの画面を覗き込む笑子の小麦色のうなじから、そっと添わした玲子の手の甲に、生き生きとした若い娘の脈動が伝わります。命のリズムを共有する嫺やかな安心感が、二人を優しく包込みます。

貴方のお尻にビール瓶（上巻）

<http://p.booklog.jp/book/114739>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114739>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト